

修身小學

初等科之部

卷五

65

484

館藏書會育教

一		一	九
一	七	一	函
册	號	架	

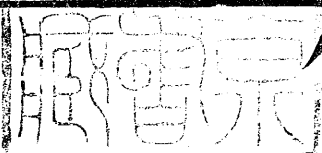
吉田利行編輯

版權

所有

修身小學

星文館藏版



修身小學卷之五

第一章

吉田利行編

○凡そ人の子たるの禮。冬はあ
たゝかにして。夏はすゞーふー。
夕に定めて。晨に省る。禮記

○孝子の老を養ふや。其心を樂しましめ。



志に違はず。其耳目を樂しましめ。其寢處を安んじ。其飲食を以て。これを忠養す。同上

○父母長上。教誡することあらば。首をたれて。これを聽くべし。妄りに自ら。議論すべからず。蒙童

須知

○父母の聲を聞かず。父母の形を見ずといへども。父母の常に教へ誠め給ふことを。須臾も忘るべからず。日新館童子訓

○父母若し病ひあらば。晝夜帶

を解かず。他事をすて、看病し。醫藥の事にのみ心をつくすべ

し。六論衍義大意

○往いて。来たらざるものは。年なり。再び見るべからざるものは。親なり。家語

○孝子は。日を惜しむといへる
こと。心に掛くべし。大和俗訓

第二章

○親類一門。多しといへども。父
母を去りては。兄弟ほど。親しき
はなし。いかんぞ。おろろかにす

べけんや。大和中庸

○何れの中も。争はざるが肝要
なれども。就中。兄弟の中は。一紙
半銭たりとも。争はざるを先と
すべし。童蒙解

○若し。兄善からずして。我に非

道を加
ふると
も。始終。
第たる
の道を
つく—



て怨みとがむべからず。六論行
義大意

第三章

○我が國は。開闢より。今日に至
るまで。君臣父子。おのづから定
まりて。名分大義。既に立ち。君は。
則ち萬世不易の。君にして。臣民

は亦萬
世不易
の臣民
なり。

名分大
義説



○君に事ふる要道は身を修め
徳を立つるに始まり。君の爲め
に功をなすに終る。日新館童子訓

○其國の志おき法度をよく守
り。其職分をよく勤めて。年貢公
役を懈怠せず。一心に國君をお

それ敬ふは。庶人の忠節あり。翁問

答

第四章

○家の主となりては。三族を親
しむべし。三族は。第一に。父の族。
第二に。母の族。第三に。妻の族か

り。家道訓

○親戚をば。時々招きて。饗應す
べし。志からざれば。情意うとく
なる。同上

○孔子。郷村に在りて。一族の出
あひまハ。身を引きさげて。唯慎

家道訓

み給ふとあり。聖人さへかくの
如し。況や常體の人。毫も驕り慢
りたる。舉動あるべからば。六諭
行義
大意

○親戚は。皆先祖の子孫なり。貧
賤の者を。先づ救ふべし。貧賤の

者は。少しの助けよても。大に益
を得て。よろこぶものなり。集義
和書

○富貴の家は。貧賤ある親戚の。
出入りを。主人の。仁愛のあ
つまこと。あらわれて。其家の。面
目とすべし。かゝる人の來たる

を。恥づべからず。家道訓

第五章

○親と師と。敬ふ道理。同トければ。いづれも。呼び給ふ時は。返事を。ゆるくせず。早く答へて。まおるべし。天和小學

○師匠の前に。居る時は。何にて。も。問ひかけ給はば。其辭の。終はるまで。待ちて。返答申し上ぐべし。同上

○物を習ふ時と。再び不審を。問ひ返す時は。行儀を。改めて。うけ

たまをるべし。同上

○年わかまき者は何事によらず。我がまゝに。取り行ふべからず。必ず家の内の年だけ給ひたる人に。うかいひ。其仰せをうけて。行ふべし。同上

○尊者の前に侍べる時。又は他へ行き。我が上に立つ人。來たらば。其座をたちて迎へ。歸りにも。又送るべし。日新館童子訓

○少者。長者に従ひ行く時は。何にても。長者の持ちたる品は。少

備身以事 卷之三 皇朝 録

者受け取りて。其勞に代はるべ

し。同上

第六章

○朋友は互にまことありて。た
 のもしく。表裏あかるべし。大和 俗訓
 ○凡そ人倫の道。朋友の教へ誠

めの。たすけよよりて。立つ理な

れば。朋友も亦重き人倫なり。同上

○同官同列の人は。私意の争ひ

なく。人我の隔てなくして。和睦

し。相愛すべし。是亦朋友の道に

て。君の爲めなり。初學訓

修身、卷之三、皇朝、録、十一、皇朝、録

○人の心を知りて後。交はりを定むべし。知らずして交をれば。後悔することあり。大和俗訓

第七章

○人を愛する者は。人恒にこれを愛す。人を敬する者は。人恒に

これを敬す。孟子

○凡そ愛敬を行ふにハ。信を本とすべし。信なくしては。人と我との心。感通せず。大和俗訓

○人に對して。道を行ふに。人已れに従わずば。人を責むべから

ず。たゞ我が身に立ち反りて求むべし。同上

○人を愛して人。己れを親しまずば。我が愛の未だ至らざる故と思ふべし。同上

○人を禮して人。己れに無禮か

らば。我が禮未だ至らざる故と

思ふべし。同上

○行ふて得ざることあればこれを已に反求す。孟子

○我が身輕々しからずして正しければ温和なれども人あか

とらず。大和俗訓

○何程人にすぐれたる才智藝能ありても高慢の者は徳にそむける故に凶人なり。和語陰陽録

第八章

○凡そ人は恩を知るべし。恩を

知らざれば鳥獸に同じ。初學訓

○父母に孝を行ひ。君に忠をつく。師を尊び。故舊に厚くするは。皆恩を報ふる道なり。大和俗訓

○人の生涯にハ。恩をうくること多し。一言のなすけをも感ず。

一事の志一をも心にかけて思ふべし。同上

○人に施しては念ふことなから。施しを受けては忘るゝことなから。表氏世範

○凡そ恩を知らざるは世の凡

人の習ひなれば責むるに足らず。我が身かゝる薄き人情にならひて恩を忘るべからず。大和俗訓

第九章

○朝は早く起き。門戸を早く開かせ。家内の塵を拂ひ。門の内外。

庭中を
掃除し
て。皆潔
くすべ
し。
道家訓



○居室も。庭中も。常に掃除して。
潔くすべし。暗くけがらはしけ
れば。心氣の養ひとあらず。同上
○人の家居は。貧富によらず。身
の分より。少し狭きがよし。富貴
なりとも。無用の家作。廣くすべ

からず。同上

○家居は。たゞ堅く。潔くして。飾りあまきが。心を養ひ。目を養ふによし。同上

○飲食は。飢渴をやめんためなれば。飢渴だに。やみおぼ。其上に。

むさぼらず。恣にすべからず。養生

訓

○凡そ飲食の物は。多少美惡を。争ひ較ぶることおかれ。童蒙須知

○衣服は。儉素に。飾りすくなく。よのつねにして。いやりからず。

るがよし。大和俗訓

○又甚だ質朴に過ぎて。けがら

はしく。鄙野なるもあり。同上

○貧しき人も。つとめていさぎ

よく。垢付きけがれざるを用ふ

べし。同上

○富める人も。美麗を好み。無用
の服。多くすべからず。同上

○大かた。衣服のもやうにても。

人の心は。たしはからるゝもの

なれば。心を用ふべし。童子訓

○人の衣服。器物の價をはかる

べからず。是甚だいやーまこと
かり。或は人の物ずきを。そーる
べからず。日新館童子訓

第十章

○凡そ人は。幼き時。艱難苦勞を
して。忠孝を務め。學問を勵まし。

藝能を
學ぶべ
し。かく
の如く
すれば。
必ず人



にまさりて。名を揚げ。身を立てて。後の樂一み多一。童子訓

○勞苦を樂一み。本業を營めば。其後。衣食必ず餘りあり。口腹をほ一いま一に一。逸樂を事とすれば。其後。衣食必ず貧窘す。天に

非ざるなり。人にあらざるなり。自らこれを取るなり。畜徳録

修身小學卷之五終

明治十八年七月二十二日版權免許
同 年八月 刻成

福岡縣士族 定價金六錢五厘

編輯人 吉田利行

福岡縣福岡區福岡
西職人町六拾八番地

同

出版人 林 芥 叢

同縣同區同所
箕子町百三拾番地

121101-97-1

修身小

同

同

同

同

同

同

右田喜九郎

同縣同區博多
掛町十一番地

長濱竹次郎

同縣同區福岡
下名島町五十七番地

高田芳太郎

同縣同區博多
菟屋町十一番地

修身小學

卷六

圖書會館		
一	七	一
册	號	架

65
484

K110,1
291
2